

杏の若葉

宮本百合子

青空文庫

「おや、時計がとまっているでないか」

母親の声に、ぬいは頭をあげ、古い柱時計を見上げた。

「ほんによ」

「いつツから動かねえかつたんだか——仕様ないな、ぬい、若えくせにさ、お前」

「だって母さん、耳についちまつているから判んなかつたのさ。」

ほら——聴いてお見、カチカチ云つてるようだろ？」

あんず

杏の若葉越しに、薄暗い土間にまで日のさし込む静かな午後であつた。

「早く巻きな」

ぬいは煤けた大踏台を持ち出して、ギギギギと古風な柱時計を巻いた。踏台を降りようとすると、いつの間にかぼんやりした金色の振子が、西洋花を描いた硝子蓋の奥で止つてしまっている。ぬいは、また上つてねじをかけようとしたが発条ぜんまいは一杯だと見え、かたくて廻らなかつた。振子を指で突つくと暫の間、コチコチコチコチ機械が動くが、それは一分も保たず、直ぐ止つてしまふ。

ぬいは、踏台に立ったまま、胡桃割くるみりをしている母親に声をかけた。

「この時計——どうかなつちやつた」
「なして」

「動かないもの——ちゃんと——ぼけたのね」

呑気に、尖の折れた帳綴じで胡桃の実をほじくっていた母親は、むきに、

「そんなことあるもんでない」

と立ち上った。

「どれ、もう、こりや二十年もこわれずにここに掛っていた時計だもん、そういきなり駄目になるこつてないわな。どれ、降り、私がやって見る」

母親は、小学校というものもなかった時分に育った婆さんだから、高等小学を出たぬいより、機械なんかいじるのはもつと下手であった。ただ力はあるから、りきんで、ねじを逆に廻そうとな

どする。

「ああ駄目だわ、母さん、発条が切れたら大変だよ」

「何としていいか。これは困ったな——ああ、ぬい、一走り清ちやんとこさ行つてこ。きつといるから。あの子なら、訳はあるまい、ついこんないだ、小形屋の蓄音器をすつくりほごしてまた鳴るようにしたつてもの」

ぬいは、気がすすまないながら、紺の前掛をはずして、野道を、半町ばかり北よりの清二の家まで迎いに行つた。清二は戸口で藁打ちをしていた。ぬいを認めると、彼は藁を打ちながら、頭を動して笑い、

「ウウウウウ」

と挨拶した。ぬいは、まるで困った気持でお辞儀をしながら赧はにかくなった。ぬいは、口の利ける者とはかりつき合うのに馴なれているので、清二のように評判の伶俐者で、あんなに髪を分けた立派な成人おとなの男で、而も唾の人ひとに、どんな風にしているのかいつも困るのであった。

清二のおふくろが、ちよいちよい指で手真似をしながら、ぬいの用向きを伝えた。清二は、眼で、この子の家うちか？ と訊きながらぬいを指さした。ぬいは力を入れて頷いた。清二は、頬ぺたの瘠しなせた笑顔で手つきをした。

「もう直ぐこの仕事がすむから、そしたら行きますとよ」

「じゃあ、どうぞ」

ぬいは、ぱたぱた杉垣をかけ出し、野道ではゆっくり歩きながら、清二が一緒に来なくてよかったと思つた。ぬいは、彼がこの春、草履屋から逃げて来たときの話を聞いた時から、しんでは深く彼に同情していた。清二は、草履屋の主人が人並の賃金を自分だけに決して払つてくれない上、何か悪い病氣持ちの朋輩と一つ床に寝なければならぬのがいやでとうとう歸つて来たのに、口が利けないからよくその氣持が通らず、ただの我儘と思われ二度も親爺に引っぱられてもとの店に戻された。三度目に、彼が涙をこぼして頼んだのでやっと家においていいことになった。ぬいは、口が利けないだけで彼はどんなに苦勞しているのかと思うと、会つた時、一度はちよいと、

「ほんとうにお気の毒だと思つてよ」

と云わずには気のすまない心持がした。啞は耳がきこえないから、ぬいが知っているただ一つの方法——言葉で喋ること——では、ただ一つの告げたいことさえ告げることが出来ない。

いろいろそういう氣持なのに、半町のところでも黙りこくつて清二と家まで歩いて来なければならなかったら、どんなに工合わるかつただろう。

十五分ばかり経つと、清二が、太い羽二重の兵児帶をしめてやつて来た。

「ア、ウ、ウ」

彼は、炉の横に坐つて挨拶した。

母親は、やはりわからないくらいにだが当惑した風で、普通の
人に云うように、

「ええお天気でござります」

と云いながら、茶を注いで出した。清二は、それを飲むと、直ぐ
下してねかしてある柱時計を指さした。母親はいそいで合点した。
清二は、節の高い指で裏蓋をあけ、複雑な機械のあちらこちらを
試していたが、ぬいと母親と二人の方を見ながら、何かを掌にあ
け、頭をこするようなことをした。

「アウ、アアア」

そして、発条にまた何かあけるようにする。

「何だろ、清ちゃん何がいるのかね」

「――母さん！　油、髪の毛だわ」

ぬいは、小さい椿油の壺を出して来た。清二は、その壺を見ると、嬉しそうにうんうんをして手を出した。が直ぐまた別のものを探しだした。ぬいは、一生懸命になって、彼のいるものが、紙切れなのを当てた。清二は機械のところどころに少しずつ油をさして、やっと時計が動くようにした。

「ああ、これでいい！　ありがとうございます。まあ一服しておくれ」

再び、古風な柱時計が燻^{くす}ぶった天井の下で、活潑にチクタクい
いだした。ぬいは、溜息をついた。彼女は、母親が、沢山何か礼
して、清二の労をねぎらってやってくれればよいと思って凝^じつと

待っていた。が、母親は、柱にかかった時計を度々見て満足を示すだけで、ひどく三人は手持無沙汰だ。彼女が、思いきつて炉の火箸をとりあげようとしたときであつた。外を見たり煙草をすつたりしていた清二が、ふと、手を延して片方火箸をとつた。彼は、「ア」と、ぬいに合図し、灰の上に書き始めた。

「アシタ、町デ、ホントノ、キカイ油ヲ、買ウ」

母親は、「ほう、そうかい」

と、金を出しに立つた。ぬいは、一寸考えていたが、友達の間中に字を書いて読ませるときのように、熱心に、一字書いては判つたかどうかをためしながら、次の文句を灰に書いた。

「清サンハ、ホントニ、キカイノコトガ、才上手デス」

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二卷」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「若草」

1926（大正15）年6月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年1月23日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

杏の若葉

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>